

スト』と、あらゆるものをこう言った。それで熊は、本当に死んだと思ったのか、あまりにもこれは汚きたないと思つたのかわかりませんが、とにかく遠くの方へ行つた。ちよつとも自分が動いて、また戻ってくるといけないというので、遠くまで、見えなくなるまでじーっとしていて、姿が見えなくなつて起き上がろうと思つたら、全身凍傷ちんじやうだったそうです。手も足も、ほとんどいうことをきかない。這はいずるみたいに、この辺にくると実演するんです。パツと横になつて、こうだぞ。這はいずるみたいに行つて旭川の警察まで逃げるんですね。

警察ではすぐ連絡が入ってますから「あつ、よくここまで来たな。おまえぐらいだ、ここまで来たの。じゃまあ、とにかくゆつくり風呂でも入つて、飯でも出してやるから、着替えて休んでろよ。」連絡が入ってますから、休んでたらずぐつかまつて、あのストープですね。ダルマストープ。だから、もうそこにあつた風呂に入るふりをして、ありあわせのものをパーツと食べて、そして着替えもつてまたそこから逃げてですね。そしてとにかく大変な思いをして、彼は逃げてきたんです。

現在、タコ部屋の記録というのは、北海道のオホーツクス民衆史講座の人たちが発掘を

していますけれど、実際に逃げおせた人というのは本当に数が少ないそうです。そういう意味からいうと、本当に貴重な体験だったわけです。

そのことを僕らは、その夜間学校で聞いたわけです。のちにこれは『私の自叙伝』という講座になりました。

中村さんの話が終つたあと、『私の自叙伝』の講義というのは、次から次へと立候補者が出ました。『俺の過去も聞いてくれ。俺も似たようなのがあから、こん次は俺がやる』ずーっとしばらくの間『私の自叙伝』というのは、夜間学校のとつても人気のある講座になりました。聞いてくれる仲間がいるということですね。

いつになったら、字教えてくれるんだよ！

ところが、この中村さんに即ましていいますと、これだけの話をしてくれた中村さん。これだけの人生をくぐつてきた中村さんが、字が書けなかつた。字が読めなかつたんです。勘かで読めるんですけど読めなかつたんですね。これを僕らは知らなかつたんです。もうそんなことありえないと思つて、夜間学校で当然黒板にいろんなことを書く。読めるふ

りをしててくれましたけど、読めなかったんですね。いつか夜間学校だから、字の勉強を学校だから、いつかしてくれるだろうと思って、じつと待っていていたんだそうです。

ついにがまんができなくて『いつんなつたら、話は聞くのはいいんだけど、いい話いっぱい聞いたけど、いつになつたら字教えてくれんだよ』という話になっちゃったんですね。

『じゃあ、字の書けない人もかなりいるみたいで、読めない人もたくさんいるみたいだから……』という事で、『あいうえお学級』というのが作られました。はじめたんですが、その日になって、廊下までのぞきに来る人はたくさんいるんです。だけど、中にはだれも入ってこないんです。いろんな教科書も準備しましたね。『さあ、始めますよー。どうぞ、どうぞ』というんですけど、『いやあ、ちよつとのぞきに来ただけ、またね』というかたちで、みな行っちゃうんですね。やつぱり、字が読めない、書けないという事は、どんなにか恥づかしかった。どんなにかつらい思いできたということですね。これは、いろんな人が関わってくれましたけど、どうしても出来ないんです。その日に腹が痛くなったり、熱が出てみたりですね、仕事が急に決つたりということで、とにかく来ないんです。

そのなかで、長岡さんという方が『どうも先生がいると恥づかしいから、俺たちだけで

こつそり始めようや』というので、自分のドヤにですね、二畳のドヤに、三人の仲間を集めて識字を始めてくれました。

識字をはじめ

これにつけた名前が『寿寺小屋』というのです。『俺たち学校までいかねえ、まだ。学校ができる前、寺小屋といったそうじゃねえか。じゃ、寺小屋でいこう』ということで、『寿寺小屋』という名前でもって、細々と三人でもって『えー、あという字はどう書く』なんて、始めたわけですね。

だけど、やつぱり先生がほしいということで、僕のところにも相談があったもんですから、中村さんも実はこの仲間に入っているわけなので、お年寄りの人がいいだろうと思って、僕の中学校のときの先生ですね、校長先生をやられた方ですが、その先生にお願ひしたんです。国語の先生だったものですから、快く引き受けてくれました、このドヤまで来てくれましてね。

そして、後から本当に手を持ってね、本当に『あ』から始めたんです。『あ』という字

はこうだろう、ここで止める。ね、こう。と、耳のそばで先生の息づかい、声が聞こえる、暖かい大きな手が、俺のゴツゴツした手の上へのつかって、字書く。『いい気持だったなあ。俺あんなこと、学校のときでもない。良かったなあ。でも、もうちよつとそんなのがうまくいくの、女の先生が来てくれるといいなあ』てなもんですね。

それで大学生の方に頼みましてね。女の先生が来る。三畳間ですから、もうくつつくようですね。だれが隣りにくるか競争です。早く来た人が隣りに座られますから、時間が決まるともうサツと横に来て、手も洗ってきて『はい、先生、持って、持って』というふうなことで、噂を聞いてまたそのドヤに来る。『何だ、女の人が教えてんの。俺もちよつと入らして』ということだね。『お酒飲んできたらダメだよ。お酒飲んだら、先生嫌うからダメ。まじめな人しか、今日はダメ。』というふうなことで、だんだん人が集まってきた、いっぱいになっちゃったんですね。びっちりくつついて。

その先生も、実にそのひとりひとりの進路に合わせて、実に面白いことやってくれました。新聞のマンガの四コマですね。僕もそのときには一緒にそばにいるように許可されましたんで、寺小屋と一緒にいたんですけど、四コママンガを持ってきて『はい、読んでご

らん』というんです。『おー、はい、はい。読んだ、読んだ』『読んだよって、わかったの』『ああ、わかったよ。いいねえ、これ、なかなかいいねえ』読めないんですね。『はい、ひとつずつ読んでごらん』そして、四コマ最後まで読めると『なるほど、そうなのか』といってゲラゲラ笑うんです。四コマのマンガの面白さというのがわかりたかったです、わかんなかった。そこで、まず新聞の四コママンガを、今度自分で切りぬいてね「わかった、わかった」それで、あいうえおの四十八文字の全部ありますね。これに合わせて読んでいく。

こういうふうにして、識字学級はどんどん、寺小屋という名前で拡大してきて、とても人数が入りきれなくなりましたので、夜間学校がその当時事務所を持っていましたので、その事務所に変わりました。大きいところに、借りているところに、そしてそこで始まっていったわけです。

成人式にまねかれた中村さん

その当時、いろんなところと交流ができるようになりまして、東京に定時制の高等学校

がありまして、たくさんの方が出稼ぎで出てきているんですけども、その出稼ぎで出てる家の子どもさんたちですね。それが集団就職で東京に出てきて、東京の定時制高校に通うというふうになったんですね。そして、そこで寿町というところがあって、そこには出稼ぎに出てきて、そのまま帰らないオヤジみたいなおっさんたちがいるところだ、というふうに聞いたもんですから、訪ねて来てくれたりしたんですね。

定時制高校ですから、二十歳になる人もいるわけですね。成人式を迎える。その成人式の日を寿でやってくれるということになったので、その成人式を迎える定時制高校の人たちを僕ら招待して、町のおじさんたちと交流会をやったことがあるんですね。もしたら、卒業式の日にぜひ来てくれということ、中村さんはじめ、数名が招待されました。

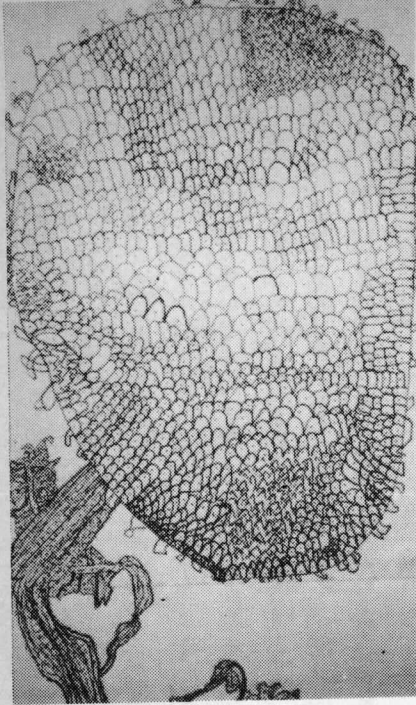
たまたま、その日、僕がどうしても都合が悪くて行かなくなってしまったので、中村さんたちだけ行ってもらったんです。

卒業式が終りましてね、懇親会がありました、中村さんお酒好きだからというんで、一斗樽を買ってくれまして、中村さんの後にデンと飾って、中村さんもお酒はとっても強い人ですが、みんなが『中村さんのために、今日は一斗樽買ったのよ』って、パンと割って

くれて酌してくれるもんですから、自分のためにせっかく買ってくれたものを、全部飲まないのは悪いと思っただんですね。一生懸命、グーツと飲んで、半分飲んだと言いますが、これはちよつとオーバーだと思えますけども、とにかくモーレッツに飲んでくれたんです。さすがにやつぱり『歌でも歌ってくれないか』というので、立ち上ったとたんに意識不明になって、ぶつ倒れちゃいまして、みんなでもって介抱してそのなかのある青年ですね、

アパート借りてますが、自分の父親がお母さんと自分を捨てて、都会へ出て行ったきり戻ってこない。オヤジを見つけたら、包丁でぶつ殺してやる、といっていた青年の家に泊りまして、中村さんは介抱されました。女の子たちも、みんな一晩中、まんじりともしないで看病してくれたそうです。

気がついたとき、もう手を合わせて、



自分のために、こんなにも心配してくれる若い人たちがいるということが信じられなかったといつてね、とつても喜んで帰ってきました。そして、何とかお礼をしたいと。字を習っているから、手紙を書きたいと言ったんですが、まだこのときには、充分書けなかったんです。僕が中村さんが言ったのを下書きをしましてね。それを中村さんが写したり、直したりして書いたんですが、二週間かかりました。まあ、本当に大丈夫かな。いつ書けるかな。むこうで多分待つてらるうなあと思ってたんですが、二週間かかって出しました。ちよつと、そのはじめの、読んでみます。部分だけです。

「こういうおっちゃんを、みなさんが真心をもって、招待してくれたのを、中村は本当にうれしく、日本一の幸せものだと思います。学校の門をくぐつて、式場に入って『みなさん、お客さまはこちらにお座り下さい』と、先生が言って下さったので、そこに座りました。式の最中なのに、先生がすくつと立つて挨拶してくれ、自分はそのとき、本当に感激でした」

「いふうな、ね。そして、最後に、

「みんな酩酊して、顔を真赤にして『さあ、これからひとつ歌を歌いましょう』とい

て、私の番になって、鳩ポッポをみんなして歌ってくれて、私も歌った。私も酩酊して、緊張していたので、何を言ったのか忘れてしまった。ちよつと気分が悪くなって、それから、カクンとなって、あとはわからなくなつた。みなさんと握手して別れたかつたのに、それも出来なくて、私は横浜へ帰つてから、残念で、残念で、夜寝られなかつたです。みなさんに最後に、あんな失敗をして、迷惑をかけたことを、この中村は心からお詫び致します。どうか、みなさん許して下さい」

この手紙が書きたくて、書きたくて、二週間の間です、僕のところに来て『向こうの先生の名前何つたかな、ちよつと書いて』というようなことだね。行ってまた戻つて書いてくる。そして二週間たつて送りました。

はじめて書いた文章

その後、この学校は生活館が再開されて、生活館の中で現在やっていますが、生徒もかなり増えてきて、たくさんいるんですが、本当の字を一字一字勉強する段階からはじめて中村さんが自分の手で、自分の文章を書いたのは「手」ということ。

その当時、僕らもどういふふうにやっつけていいかわからなかったんですが、神奈川県解放教育研究会というのがあります、その事務局やっつてる大沢さんという方が来てくれるようになって、課題をひとつづつ書いてやってみようということで、はじめてのときにこういう題で、中村さんに書いてもらったんです。

「手について書いて下さい。いろいろなことをしてきた自分の手。父や母や、男や女や他の人の手など、手について考えたこと、思い出すことを書いて下さい」

こういうふうな課題を出して書いてもらいました。一時間三十分かかりました。けれども好きなタバコも吸わない。あの話をしたときは、また全然違った雰囲気、真剣に、だれかが入ってきて、そつちを振り向きもしないで書きました。書き上った文章、最後に僕らも何が書いてあるかわからなかったんですが、最後『読んで下さい』そうしたら大きな声で、はじめて中村さんが書いた、自分でだれにもおそわらないで、隣にいた先生に、字、ちょっと教えてくれ、とか聞きましたけど、書いた、はじめての文章です。これ記念すべき、いま「力にする」という文集を出してるんですけど、その第一号に載せました。

手

中村 武夫

まず、自分の手。小学校の頃は、この手で、だれかれかまわず、学校の友だちきんぞの子、女の子をなぐってきました。

だが、青年になったとき、白紙で、舞鶴でこの手で、すばらしい船をつくってききました。また、一銭五厘の赤紙で軍隊にいき、たくさんの戦死した亡きがらを、燃やしてきました。（そのとおりです）そして、この寿町で、沖仕士で、船のいろんな仕事を。

この手で想い出したらキリがない。飯場の仕事。ああ、自分のこの手。想い出すとイヤな手。また、好きで好きでたまらない手。この手を、いまつくづく見て感慨 むじうです。

こう書いたんです。このときも、はじめて中村さんが書いた文章を聞いて、大きな声で読まれたので、これも拍手喝采でした。

『書けたじゃんか、すげえ作文書いたじゃんか。おお、中村やったなあ』ちゅうので、

みんなでもう大拍手です。これから次々と、仲間たちがいろいろな作品を書いていきます。それが、ほとんど僕らの想いを超えた作品が次々と出てくるんですけれど。

そして、この中村さんは本当はこの識字をはじめましたら、戸籍を取り寄せまして、中村さんのことを調べたら、家族は全滅してたと思っていた中村さんの兄弟ですね、お父さん、お母さんは亡くなっていました。兄弟が生存しているということがわかりまして、実は三四年ぶりに、妹さん、弟さんと最近再会してきました。ひとりではとっても恥かしいというので、僕も一緒に行っただんですが、その妹さんに手紙をどうしても書きたいというので、真剣にやっぱり覚えたわけですね。そして、会ってきました。感激の対面でした。三四年ぶり、もう死んだと思った妹さん、弟さんたちと会って、今、中村さんは自分の自叙伝を、あのときしゃべった自叙伝を自分の手で何とか書きたいということで、今識字学校でがんばっています。

長岡さんのこと

同じ識字学級で、最初に始めた長岡さんという方ですね。もう僕は、次々にこういうふうにして作品が生まれてくると、一体僕らは何を字で勉強してきたのかなあ、ということ。頭を打つように、指摘されてるような気がするんですが、長岡さんにこういう小学校の生徒の作品を読んでもらってから、読んだ感想文を書いてもらったんですけれど、「涙」という題です。

涙にはいろいろな涙がある。人で一番もっている涙は、かなしみの涙だ。
かなしみの涙は人には見せたくない、絶対に、絶対に。

これは、小学校六年生の男の子の作品だったんですが、これを大きく書きましてね、みんなが読んだあと、感想書してもらったんです。長岡さんは小学校には二日、正確には三日行っただけで、まったく行っていません。福島県の山深いところで生まれて、あちこちで転々としたために、学校にはその日だけしか行ってません。ですから、中村さん以上にまったく読めなかった方ですが、彼が書いた文章ですね。

涙みせずに生きていけない、この私。何を書けばいいんだろう。言葉に出なくなる。この一枚の文章に書いてある言葉は、そう簡単に書けない。

涙とは、大切な私の心である。人間は涙はそう簡単に出不いものです。しかし生身人間は必ず、ある者は必ず壁にぶつかります。

私も小さいときに、何度も泣いたときもあります。継母に他の人とのところに子守りにやらされたときは、一度だけ泣きました。泣いたなんていうものではなかった。母のたもとでいきなり泣きました。なんぼ泣いたかわからない。ただもう、二度と涙を粗末にしたくないものだ。

母に涙を分けてもらった涙は、いつか必ず、返るときがあると思します。しかし、人間は涙を枯らしたら、死につながります。涙には、母の血を継いだ私。涙があるから、生きているのです。

もし、涙がなかったら、どうして生きることが出来ますか。

かなしいときもある。しかし、涙をこらえながら、心を鬼にして生きる。そのとき、からだのなかから、こみ上げる熱さ。熱さ。

今にも泣けそうなとき、大声で泣けるのは、人間である。

「学校」とは何か

こういう、はじめて字を書きはじめて長岡さんが、「涙」ということから、こういう文章を書いてくれるわけですね。もう完全に打ちのめされてしまいました。つまり、学校とは何かということを考えてみると、僕は学校というところは教えてくれるところだ、というふうに思っていました。だから教師は、生徒と呼ばれる人に教える存在だというふうに思っていました。

だけど、本当に、人間が人間を教えるということが出来るでしょうか。僕がこの識字学校で、あるいは夜間学校で、自分のなかで大きく価値転換したなと思ったのは、これです。つまり、一たす一は二であるということは、教えることができるでしょう。知識は教えることはできるでしょう。しかし、教えるというものは、やっぱり生き方だと思っんです。自分でつかんでいくものは、生き方だと思っんです。その生き方は、教えることができないでしょう。僕はできないと思います。ですから、そういう意味では教師も、生徒たちに教えることができないんだという、そこから出発すべきだと思っんです。



もし、伝わるものがあるとするれば、さっきの村さんの「手」という作文、長岡さんの「涙」という文章から伝わってくるもの。つまり、いのちといのちが確かに触れ合っている。ひびき合っている。お互いに呼びかけて、いのちが答えているという、そういうことのなかで、もしかすると自分のなかに眠っていたいのちが点火されて、火がつけられて、目覚めるということがあるかもしれない。そういうことだと思っんですね。

そうだとしたら、教師とよばれる人間も、自分の生き方に真剣にならなくちゃならないと思うんです。自分がどう生きていったらいいかということとを、一生懸命自分も考えなくちゃならないと思っんです。

そうなったとき、教えることはできないなあ、自分はどう生きたらいいのかなあということとを、自分のなかに問い返したときに、相手との間につながり合うものが出てきて、もしかして、その相手の人のいのちがよび覚まされることがあるかもしれない。あくまで、そういうことだと思っんです。そうすると、僕にはもう共に歩いていくということしか残ってなかったんです。だから、正直なところ、夜間学校やって、そこに集まってきた人たちが自叙伝を語って「すごいなあ、すごいなあ」と思ってるうちは、僕もまだ教師だっただと思っいます。

かつて僕も教師をしていて、やめて寿の町に来ていましたけど、しかし、識字学校で次々と書かれているものを見て、自分が青ざめていくのをやっぱり感じました。涙ということから、そんなに、涙がお母さんのいのちだ、お母さんからもらったものだ。だから俺は枯らしてはいけない、そういうふうに僕は涙をみていなかったし、どんなにお母さんに対して、親に対しての想いが強かったかということも、もう頭を打たれるようにしてわかりました。

この人たちと一緒に生きていくしか、僕にはもうないなあ。自分がダメだということが

よく、そのときにわかりました。だから、僕は、相手に注入していくというふうなことは、教育のひとつの要素ではあるけれども、違うなあ、という感じがあります。

忘れられないこと ―ある少年の死―

僕は寿町で生活館の職員という仕事は今年四月いっぱいまで終りになってしまつて、児童相談所に来たわけですが、寿町でどうしても忘れられないもので、ひとつ挙げると言われれば、このことなんです。

寿町のすぐ裏に、中村川という川があります。その川は、昔はしけが通つた運河ですが今は朽ち果てたはしけがいっぱい並んでいます。そこに、あるとき、もう四年ぐらい前ですが、子どもが自転車で遊んでまして落ちたんです。一緒に遊んでた子が「大変だー、友だちの何々ちゃんがおつこつたよー」ということで大騒ぎしまして、おとなたちが周りにかけつけましたけど、子どもも自転車も上がりませんでした。親も飛んで来ました。それからすぐ、水上警察が呼ばれる。船が来る。おまわりさんが周りに縄を張る。そして、遺体を探すわけですね。たくさんの方働者がまわりでもって見守りました。どういふふうに

探したかという船ですね。非常に原始的なやり方なんです。竹竿たけざおですね。竹の長いのを先をパツと切りましてね、それを何人も人が下へさすんです。そして何か異物に当たると「おつ、ここだ」というと、岸のところにな大きなクレーン車みたいなのが来てましてガーツと落ちて、パシヤーツの中に。怪かい獣じゆうの爪みたいにしてグーツと引き上げる。そうすると昔の鉄板のクズだとか、木の切れ端だとかそういうものがいっぱい。「あつ、無い、無い」ザツザ、ザツ。「こつちだ、こつちだ、こつちに何かあつたぞ」ジャボーツ。

これを見んなどんな想いで見てましたか。どにかく半日ぐらいの間、ズーっと、かたずをのんで見ていました。でも、見つからないんです。川はもう、ほじくり返されてドロンドロンになりましたね。そして、ザバツ、ザバツと刺してる感じですね。

夕方、仕事から帰ってきたSさんが、沖繩の方ですけど「おつ、何だ、まだ見つかんねえのか。俺ちよつと探してやるわ」部屋に上がつて、泳ぎが得意な人ですね。海水パンツひとつになつて、水中めがね持って来たんです。「だめだ、だめ。こんなとこ入んの、おまえだめだ」というのをかいくぐりましてね。グーツと飛び込んで、そして、五往復ぐらいました。時間にすればほんのわずかです。